

協議概要

(会議名)	令和7年度 第2回船橋市特別支援連携協議会
(日時・場所)	令和8年1月29日(木) 14:30~16:30 県合同庁舎分室1
(出席者)	植草学園大学特命教授 佐藤 慎二、船橋市自閉症協会副会長 三川 瑞子、 おぐち小児科院長 小口 学、県教育庁葛南教育事務所指導主事 渡邊 学、 県立船橋特別支援学校長 竹内 登志子、福祉サービス部長 岡部 佐知子、 地域子育て部長 小澤 洋一、市立船橋高等学校長 近藤 義行、 市立船橋特別支援学校長 神田 順子、小学校長会長 野木 英表、 中学校長会長 太田 由紀、特別支援学級設置校校長会長 中道 恵美子、 特別支援教育研究連盟理事長 生井 敏昭、 教育次長 小栗 俊一、学校教育部長 日高 祐一郎、 市総合教育センター所長 小川 欣弘
(事務局)	金子 勝一、鰐部 裕実、白石 亜希子、宮崎 文香、横内 正隆、星野 沙織、 武田 芳樹

<議題>

乳幼児期から学校卒業後までの一貫した支援ネットワークづくり

<概要>

- ・作業部会での検討をもとに作成した「個別の指導計画」「個別の指導計画 文例集」「個別の教育支援計画 作成・活用の手引き」「保護者向けリーフレット」について事務局から説明。
- ・福祉と共有しようというときに、18歳で福祉サービスはガラッと変わり、18歳以前と以降で連続していると言い難い部分もある。そこで切れ目ができたときに、福祉サービスへのアクセスが失われてしまうことが非常に多い。
- ・チェックリストについて、日常の生活をしていく上でここに問題があるということが中心に書かれているが、お子さんそれぞれにここが得意だというものがあると思う。そこを伸ばすことはすごく将来的には大事になってくると思うので、そういう視点も入れると良い。
- ・記入例についても得意な方を伸ばすための例示もしてほしい。それを活用することで、子どもの全体像をうまく見取ることができるのではないかと思う。
- ・記入例の中に、今回の手立てが合わなかった場合の変更の仕方に関する表記についても入れると良い。
- ・手引きの中に、「合理的配慮提供のプロセス」というところがあるが、ここはとても大事なところで、本人参加型で進めていくという時流になっていると思う。手引きは、校内の先生方の研修にも活用できると感じた。一人ひとりの特別支援教育の理解のためにも、活用していきたいと思う。
- ・この文例集はとてもいいのだが、例を提示するとパターン化してしまっ、形骸化されるという懸念もあると感じた。

- ・放課後等デイサービスとの連携ということで親を通して、相互にどんな状況か連絡ができるということで、学校にもどういう療育を受けているのかを共有できると良い。
- ・アンケートをもとに個別の指導計画の書式を変更したり、具体例を出したりしたことで書きやすくなったと思う。これを活用しながら現場の声を聞いてもらい、さらにブラッシュアップしていくような取り組みをしてほしい。
- ・自分で自分のことを伝えられるということはとても大切なことで、これは学校教育だったり家庭教育だったり、様々な関係機関と繋がる中で培っていくものだとすることを改めて感じた。
- ・リーフレットには切れ目なく支援を繋ぎますということが可視化されているので、保護者や本人の理解が深まると思う。
- ・今後、5歳児健診が始まってくる。5歳児健診をやると、より情報が増えてくると思うが、その情報の扱ってのはどういうルートで上がるのか。
- ・総合教育センターでは、年長の保護者を対象に就学相談を行っている。また、就学に当たっては、「引継ぎのための連絡票」を活用するよう保護者に案内している。5歳児健診が始まっても、大きな流れは変わらないが、こども発達相談センターとの連携をさらに深めていく。

<今後の動き>

「個別の指導計画」「個別の指導計画 文例集」「個別の教育支援計画 作成・活用の手引き」「保護者向けリーフレット」について、ご意見いただいたものを再度検討した上で、各資料を完成させ、来年度からの活用を目指す。

来年度の連携協議会の方向性は、引き続き「乳幼児期から学校卒業までの一貫した支援ネットワークづくり」を目指して検討していく。具体的には、今回作成した手引きや文例集の活用についてさらに検討し、様々な機関と連携するにあたり、活用しやすい内容にしていく。